柄，生活などをこまごまとかきおくっている．キミは小金井か緒方にとおもっていた，と篤次郎はかく．

緒方の翻訳はその妻が筆記していた．この人は榊の妹で，男子（のちの千葉医科大学教授規方規雄）をうむと，結核で死亡した．妻の妹は師範女子学校卒の教師で，なまいきで書生と議論するという（のち耳鼻咽喉科教授の岡田和一郎と結婚した徳子，世話好きな活動家だった）．緒方は高等中学教師高田勇吉の妹をむかえたが，この女に情夫ありとのちにしり，おいだそうとしたができず，大悶着ありと．榊は妻をきらっていたが，妻は両親に気にいられていて離婚できず，新橋であそんでいたが，ついに離婚して裁判沙汰になっている．青山のところでは，少美の下女が妻の悪口をいってまわっていたが，ついに離婚となった．妻は疳癖つよく，青山をみつけ次第ころして怨みをはらしてやるといっている．佐々木はよい家の婿だが，父は外出をこのまぬので外出できず．よそできいたところでは，吉原であそび二絃妓を妾にしているとのこと．さて，こういった教授家庭の混乱ぶりの大部分は，来訪した小松夫妻から篤次郎がきいたとあるが，この小松夫妻がどういう立ち場の人だったかは，わからない．

正史にかたられぬ人物像，裏事情を，とくに篤次郎書簡はかたっているのである．

（平成21年1月例会）

仏教思想と穢れとの関係

杉田　暉道

古代インドの「マヌ法典」に記されている穢れの思想をみると，出産，性交，排泄，月経，死などの生命の再生産のために，欠くことの出来ない重要な生の営みを，穢れのみなもとと考えた．

そして身体の部位については，へそから下の部位が，へそから上の部位にくらべてより穢れていると考えた．

わが国においては，穢れの思想が古くから存在したことは「古事記」などから明きらかである．さらに殺生禁断の詔勅が天武4年（676年）に出された．平安朝の後半期になると，戦争や疫病がはげしくなり，人心の不安が一層広まったので，仏教は現世は穢土であると説き，往生して浄土へ行くためには，念仏を行わねばならないと強調した．

さらに「地獄草紙」という絵巻物が出版されたために，地獄の様子が更に理解され易くなり，死後の恐怖感を中心にした仏教思想が一挙に民衆の間に広まった．また朝廷は「天下触穢」の布告を出し，穢れを消去する為に，占い師を使って種々のタブーを出した．かくして，凡そ穢れたことに遭遇したときは，人の死亡では30日間，出産は7日間，家畜死は5日間，家畜のお産は3日間とした．

つぎにわれわれの日常生活における穢れの実態について検討した．これについては，衛生習慣と関係あるものを，1）空間との関係，2）身体との関係に分けて検討した．

1）の空間との関係については，日本人は外から帰宅すると，玄関で靴または下駄をぬいで部屋に入る．さらに，神社，寺などでは「土足厳禁」の札をよく見かける．また葬式に参列した時には，塩を身体にかけて清める．2）の身体との関係については，食事の前には手を洗い，箸を用いて食事をする．

2）の身体との関係についてみると，日本人は食事の前には，手を洗い，食事をする時には箸を用いる．また，バス，タクシーの運転手などは，白い手袋をはめている．白い手袋は清潔を示しているのである．また身体についてみると，下半身は

汚いとされ，したがってこの下着の洗濯は他のものとは別にしてより丁寧に洗濯する．

さらに家の中では，トイレは不浄であると考えられているので，トイレ専用のスリッパがあり，タオルもトイレ専用のものが用いられる．このような行動は，最近は外国人の影響を受けて大分変わってきた．（西洋の家ではバスルームの中にトイレが設置されている．）

以上述べたように，現代の衛生習慣と穢れの思想との関係について，例をあげて述べたが，これらを要約すると，内・外＝上・下＝清潔・不潔＝浄・不浄の思想が存在することがわかる．

最後に「マヌ法典」の穢れと古代日本の清浄・不浄の思想とを比較すると，明白な類似を見出すことができる．すなわち，「マヌ法典」では，脂肪，血液，頭垢，大小便，鼻汁，耳垢，痰，涙，眼脂，汗を穢れとしたが，「古事記」においては，汚染されている物体および液体を見たり，触れたりすることが不浄であると考えたのである．

（平成21年9月例会）

森鷗外と原田直次郎

荒井　保男

鷗外，森林太郎は西欧芸術に造詣深く，ドイツ留学帰国後，美術批評を行い，美を論ずる場合，審美学を規範として行うべきことを提唱し，審美学を移入し，わが国の近代美術発展に貢献した功績は大きいが，鷗外の芸術観の形成に，少なからぬ影響を及ぼした人物がいる．原田直次郎である．原田を知り，鷗外との交遊を知ることは，鷗外の芸術観を理解する上で，大きな意義があると思われる．

原田直次郎は鷗外の名作「うたかたの記」の主人公のモデルである．

原田が鷗外と知り合ったのはミュンヘンに於いてであった．鷗外がドレスデンからミュンヘンに赴いたのは明治19年3月8日のことである．鷗外の日記によれば，同年の4月25日に原田は鷗外の訪問を受けている．二人がどのようにして知り合ったかは明らかでない．岩佐新の紹介とも云われる．

原田は兄豊吉の紹介で明治17年2月渡独．兄豊吉の紹介でガブリエル・マックスの門下生となり，ミュンヘンアカデミーに入学し，そこに通学するとともに，マックスの個人教授を受けた．

この時代，すでにフランスでは印象派の時代であったが，ミュンヘンではビロティらが君臨しており，これに反抗して分離派の生ずるのは，明治20年代のことである．

鷗外は処女のような官能でドイツ絵画を真摯に学ぶ原田の姿勢に心惹かれていった．原田は芸術（美）そのものに没入して他を顧みない美の中に生命の尊さを感得する心の持主であった原田は夢みる人である．夢みる芸術家は自分の思想に忠実であろうとする．思想は技術によって表現されるものであるが，原田は技術を超越したところに価値を認めていたのである．

この原田の芸術論に鷗外の中に内在していた文学論が共鳴しあい，鷗外の芸術観に影響を及ぼしていったと思われる．原田との邂逅が鷗外をして美術批評家への道を可能にしたのである．

バイエルン国王ルードウィヒ二世が明治19年6月13日，スタインベルヒ湖に溺死するのに遭い，のち原田らと同地を訪れ，それがやがて名作「うたかたの記」の誕生となる．

二人はあい前後して帰朝するが，明治23年春，第三回内国勧業博覧会に出品した原田の「騎馬観音」が外山正一（東大教授）によって批判されると，鷗外は憤然として原田擁護の筆を執った．「外山正一の画論を駁す」がそれである．原田はこの仏画により人間味のある観音像を意図し，仏画の